

近畿病院図書室協議会第115回研修会

研修部

日 時：2007年12月7日（金）10:00～17:00

場 所：関西労災病院 管理棟4階大会議室

テーマ：デジタルメディアを駆使し、より高品質の病院図書館機能をめざそう

プログラム：

1. 電子出版の現状と課題
夙川学院短期大学 湯浅俊彦氏
2. Googleについて
京都学園大学 高橋和子氏
3. 図書館パスファインダー
愛知医科大学医学情報センター（図書館）
市川美智子氏
4. 賢い医師・患者育成の場としての病院図書館：皮膚科医からの提言
関西労災病院 幸野 健氏

参加者数：27名

会場提供施設の病院長奥謙氏より「デジタルメディアの活用法を学んでいただき、インターネットなどで検索した結果からスムーズに情報源にたどり着けるよう、整備していただきたい」との課題を頂戴しました。管理者からも図書館への期待が大きいことを実感しました。

<電子出版の現状と課題>

湯浅氏には、2001年第96回研修会で講演していただいています。最近の著作として『湯浅俊彦. 日本の出版流通における書誌情報・物流情報のデジタル化とその歴史的意義. 東京：スタジオポット；2008/01.ISBN：978-4-7808-0111-8』があります。7年前の当時、外国雑誌のオンライン版刊行が本格化し、「冊子体がな

くなれば、図書館はいらなくなるのでは？」と、本気で危惧するムードが図書館員にはありました。しかし、その後の変遷は、出版社側主導一辺倒ではなく、出版流通・Web検索ツール・図書館との連繋が模索・試行され、デジタルメディアを巡るパワーバランスが変わりつつあるといえるでしょう。ハードメーカーによるさまざまな試行錯誤の終着点が、任天堂DSというくだりでは、デジタルメディアの運用の着地点は、やはり利用者側主導によるのでは、と思わせました。

講義の終盤、「EPIC 2014」の映像紹介がありました。架空企業「グーグルズン」が「EPIC」に至る過程、未来予測が淡々と語られていくさまに愕然としつつも、そういった一連の機運を批判する研究者たちが、まだ大勢居ることに気付かされます。この批判的提言に触発された私たち図書館員は、今後どういった仕事を展開できるのでしょうか。

<Googleについて>

高橋氏は、生命保険企業内の図書館で長らく司書をしてこられました。現在、情報活動研究会INFOMATES: INFOrmation MAnagement Technology Exchange Square (情報に関係する仲間たち)を企画されています。今回は、Googleの数多ある機能の紹介を時間の許す限りお願いしました。ふだん私たちは、GoogleなどのWeb検索ツールを、その時その時有用だと思われるサイトを探すために使っています。しかし、Googleのロゴ周囲にあるさまざまな機能を、どれほどのひとが活用しているでしょ

うか。とくに、「more >>」まで覗きに行く人は少ないと思われます。そこに「Google Scholar」という学术论文に特化した検索エンジンがあり、文献検索ができ、NII（国立情報学研究所）のCiNiiへ、さらに原著論文本体へとリンクされている事例に遭遇します。従来、病院図書館員は、利用者とコミュニケーションをとりながら、「文献取り寄せ」のためのILLにかなりの労力と時間とを費やしてきました。しかし、今はWeb検索ツールから論文のWeb版にたどり着くのになぜか十数秒しかかかりません。このようなWeb環境の激変は、ここ数年ほどのことであり、図書館利用者からみた「論文入手」が、有料か無料かの二者択一になりつつあるということ自体が、何を示唆しているのか、よく考えておく必要があるでしょう。

<図書館パスファインダー>

市川氏は、所属図書館において地元公共図書館5館との地域連携業務を行っていらっしゃいます。その業務のひとつ「医療・健康に関するパスファインダー」の共同作成についてお話いただくことにしました。単館、しかも医学図書館のみで作成する「パスファインダー」では、一般市民の利用は現実的ではありません。医学図書館と公共図書館が役割分担し、「共通パスファインダー」を構築していく過程で、選書協力や分担収集をも含めた連携にも発展してきているそうです。そもそも「パスファインダー」とは何なのか、の初歩からお話いただいたので、大変わかりやすかったと思われます。病院図書館でも患者・患者の家族向けへの医療情報の提

供を模索しているところです。一般の利用者にもわかりやすい「パスファインダー」作成のお手本にしていきたいと思いました。

<賢い医師・患者育成の場としての病院図書館：皮膚科医からの提言>

幸野氏は、システムティックレビューにも携わっていらっしゃる皮膚科臨床医です。一般の人が皮膚のトラブルの常識だと思っていたことが、実は全く根拠のないこと、という事例を語っていただきました。とくに印象に残ったのは、ありふれているとされている「帯状疱疹」を正確に理解している臨床医が少なくなっていること、「糖尿病」と皮膚科との深刻なかかわりなどで、それらは皮膚科専門医ならではのお話でした。

また、自身の研究や臨床に図書館はなくてはならないものだとおっしゃっていました。今回のタイトルは当初「図書室」とされていましたが、病院でも図書館としての機能を発揮していくべきだ、との目標を込めて「図書館」としていただくようお願いし、快く賛同していただきました。従来のような「資料無い」「人居ない」のナイナイ尽くしではなく、病院図書館員という担当者が居て、有用な資料の整備を病院側にどんどん提案していき、導入していただきたい、という要望を語っていただきました。

求める人に求められる情報を的確につなぐという司書本来の役割を、われわれ病院図書館員は担っていかなくてはならないと思いました。

(文責：中村雅子/大阪府立母子保健総合医療センター)